

タイ王国バンコク都消防局における専門家派遣事業(タイ王国)

2013年2月17日(日)～2月21日(土)に、専門家派遣事業タイ王国バンコク都消防局派遣案件について下記のとおり随行及び同行支援を行った。その概要等について以下の通り記載する。

●指導研修概要

平成25年2月17日(日)～3月9日(土)までの約3週間にわたり、クレアの「自治体国際協力専門家派遣事業」を利用し、東京消防庁警防部警防課 早坂誠指導隊長以下5名がバンコク都消防局へ専門家として派遣され、救助技術の指導研修を行った。

バンコク都消防救助局は、2003年警察機関から分割され、現在約2000名の職員で構成され、域内に35消防署を有し、消火・救助を主な業務としている。今回、バンコク都郊外の同都消防局訓練施設であるラチャプラチャ訓練センター(Rachapracha Training Center)において、救助活動技術や火災時の救助技術の向上、安全管理を重視した消防活動の指導、資機材を活用した実災害に対応できる活動技術の指導、各資機材活用要領の指導等、実践的な救助知識・技術を幅広く修得することを目的として研修が行われた。

研修には、バンコク都消防局管内の8の消防署から5名ずつ選抜された救助隊員計40名が参加し、4班体制による訓練が実施された。同局担当者によれば、各消防署からは実務経験5年前後の有望な若手職員が研修生として選抜されており、派遣元に戻り今回の研修成果を消防署にフィードバックし、若きリーダーとなることを期待して今回の研修を実施したとのことであった。

2月17日

●開講式

- ・ Pol.Col.Pichai Kriengwatanasiri バンコク都消防局長及び菱田調査役によるスピーチ
- ・ 記念品贈呈、写真撮影



記念品贈呈

(写真右 : Pol.Col.Pichai Kriengwatanasiri バンコク消防局長)

●訓練場見学及び資機材の確認

- ・放水訓練の際の水供給の方法、ロープ本数や長さ、梯子の状態、規格等の詳細確認がなされた。
- ・研修前の訓練用資器材の確認時、4班編成の40名が救助活動訓練を実施するには乏しい状態であったが、バンコク都消防救助局に資機材増強を依頼し、訓練内容を指導員と講師が協議し、工夫をこらし充実した訓練への準備がなされた。

2月18日～20日

●基本・応用結索

- ・ナイロンロープとザイル系ロープの特性の説明がなされ、それぞれの結索方法の違いを展示したうえで指導がなされた。バンコク都消防救助局のロープは、主にザイル系ロープを使用し

ているため、東京消防庁が指導しているナイロンロープとの結索方法が異なっていることから指導方法を現地で検証する必要があった。しかしながら、ザイル系ロープの基礎知識、指導技術のある東京消防庁の職員が専門家として派遣されていたため、この状況に柔軟に対応し、現況のバンコク都消防救助局に定着する技術指導が実施できた。応用結索訓練では、高所からの救出時に使用する二重・三重もやい結びと、ポール等への拠点固定の実習が行われた。



資機材（ロープ）の材質及び長さの確認



専門家による基本結索方法（エイトノット及びダブルエイトノット）の指導



専門家による応用結索方法（拠点結索）の指導

● パクチョン市消防署視察（2月19日）

消防行政の現場の様子を視察したいという早坂専門家の意向により、実際のタイの消防署の運用状況に関する視察がパクチョン市消防署にて行われたため、当事務所職員も同行した。視察先のパクチョン市消防署はバンコク都消防局とは管轄が異なり、人口 20,000 人のパクチョン市域内をカバーしている。主な聴取内容は以下の通り。

・消防署は市長による直接統括部局として位置づけられており、署長1名、副署長4名以下、職員は27名いる。消防隊員は12時間勤務の2交代制のシフトにより勤務にあたっている。

・業務内容は火災発生時の防火活動のみであり、救命活動は行っていない。タイではバンコク都消防局管轄区域内以外の地方都市では、救命活動は民間ボランティア団体が一手に担っている（救命活動必要時には発見者は警察



パクチョン市消防署外観

《191番》に電話すると、警察が民間ボランティア団体に出動を要請する仕組み）。

・近隣一帯に広がるとうもろこし畑での山火事が非常に多く、小規模なものを合わせると年間100件程度山火事の消火活動を行っている。一般住居での火災は2012年は2件発生し2名の死者が発生。通年、火災発生件数及び死者数は同程度の数値であるという。

・署の車両装備は、15mはしご車1台、水送車3台、ポンプ車2台。

所感

今回指導にあたった専門家によれば、当地の消防署において現場で使用される資機材の仕様や車両装備等の手入れの状態が東京消防庁のそれとあまりに異なっており、自分たちが培った救出方法をそのままバンコク都消防局に当てはめるのが難しいことに戸惑ったとのこと。そのことに加え、タイの文化慣習による消防隊員の時間感覚、価値観の違いを随所に感じ、苦心する場面もあったようようである。

しかしながら、研修を通じて真剣な指導が研修生に対して行われた結果、最終日に行われた総合訓練では高所宙づり救出や急傾斜地転落傷者救出、斜めブリッジ線活用救出、火災救助、一斉放水等の総合演習がバンコク都消防局副局長、各消防署長及び来賓の前でチームワーク溢れる姿で披露されたという。研修終了後、専門家が一人の研修生に感想を尋ねたところ、「常に微笑みを絶やさないようにするのがタイ国民だが、今回の3週間にわたる研修は笑いが一切なく厳しい訓練であった。でも心から感謝している。」との返答を得たことで消防スピリットに国境はないと強く感じた瞬間だったとの報告を受けた。今後、研修を終了した研修生が、派遣元に戻り若き指導者としてバンコク消防に有効な活動技術を他の職員に技術指導することで、バンコク都消防救助局の消防活動技術が向上することを強く望むという専門家の熱意を同行支援を行った中で強く感じた。

また、研修最終日に行われた懇親会の席において専門家はバンコク消防局副局長を含めた幹部から「東京消防庁の消火・救助技術は安全性と迅速性を重視した方法であり大変参考になった。これまで当局は消火・救助技術の先進事例はスウェーデンや中国などを参考にすることも多かったが今後は東京消防庁方式をもっと多く学ばせていただきたい。そのために年に2回くらい指導に来てくれないか？」とお願いされたとのことである。

今回の専門家による指導研修には、昨年11月に開催されたアジア大都市ネットワーク21の共同事業により東京消防庁にて研修を受講したバンコク都消防局職員6名が参加していたため、複数の指導研修が有機的に結びつき、その成果も高度なものとなったように思う。今後もクレアでは引き続き日本の自治体職員が有する高度な専門技術を国外で生かすことができる場を積極的に設け、日本と海外の交流のきっかけづくりをサポートしていきたいと思う。

(タイ・ナコンラーチャシーマー出張時における聞き取り等)
(長崎市派遣・田中所長補佐)